

海岸平野における自然環境変遷と 人間活動との関係

——静岡県浮島ヶ原の低地遺跡を例にして——

松 原 彰 子

I. はじめに

1) 本研究の目的および研究の方法

人間活動は、周辺の自然環境の変化に大きく影響されてきた。日本の海岸平野は、縄文時代から人間生活の場であったが、同時に、最近約2万年間の大きな環境変化の舞台にもなってきた。したがって、自然環境の変遷と人間活動との関係を考察する上で、海岸平野はきわめて重要なフィールドといえる。

筆者は、静岡県浮島ヶ原で自然地理学的調査を行ってきたが、近年この地域で複数の遺跡発掘調査が行われたのを機会に、自然環境の変遷と人間活動との関係を考察することにした。特に、地形環境の変化と遺跡分布域の時間的变化との比較に基づき、古地理の変遷に伴って人間生活の場がどのように移り変わってきたかを明らかにする。

浮島ヶ原に関する自然地理学的考察は、地形調査、地質ボーリング・データの解析、さらにオールコア・ボーリングを用いた有孔虫化石分析などに基づいて、総合的に行われてきた（松原，1984；米倉ほか，1985；Matsubara，1988；松原，1989；1994）。

一方、浮島ヶ原では、近年の土地開発に伴い、遺跡の確認調査および発掘調査が多数行われている。その中で、筆者が現地調査を行う機会を得ることができ、すでに考古学的成果がまとめられているのは、沼津市の雌鹿塚遺跡^{めがつか}、雄鹿^{おが}

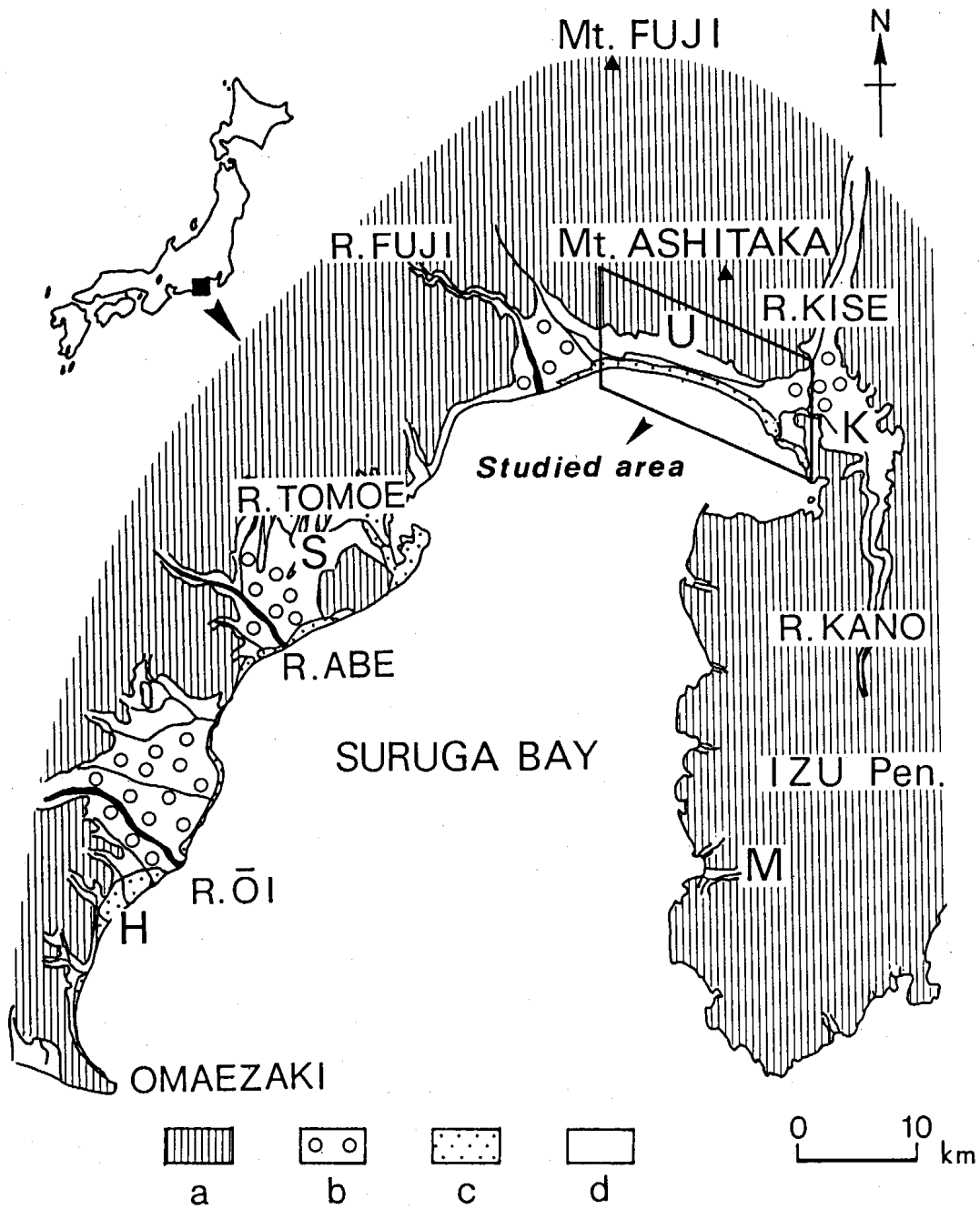


図1 駿河湾沿岸低地の概略と本論文の対象地域

a. 山地・丘陵・台地 b. 扇状地 c. 砂州・砂礫州 d. 後背湿地

M : 松崎低地 K : 狩野川低地 U : 浮島ヶ原
 S : 静清低地 H : 榛原低地

塚遺跡、神明塚古墳の3か所である。

本論文では、これらの遺跡の発掘調査における結果と、浮島ヶ原全体の古地理変遷とに基づいて、本地域における自然環境変遷と人間活動との関係を考察する。なお、雌鹿塚遺跡については、すでに調査結果を松原(1990)、(1992)で報告しているが、今回は、雄鹿塚遺跡と神明塚古墳の調査結果を加えて、より総合的な検討を行う。それぞれの遺跡の発掘調査は、雌鹿塚遺跡が1988年7月～1989年3月、雄鹿塚遺跡が1988年1月～3月、神明塚古墳が1982年7月～8月に、いずれも沼津市教育委員会によって行われた。

2) 調査地域の概要(浮島ヶ原における古地理の変遷)

浮島ヶ原は駿河湾奥に面し、富士山・愛鷹山の南麓に東西約15km、南北平均2.5kmに細長く発達する低地である(図1)。

低地の地形は、海岸部の砂礫州と背後の低湿地(泥炭地)とから成る。浮島ヶ原は、東側で狩野川河口の扇状地性三角州に、西側で富士川河口の扇状地に、それぞれ接するが、その境界はいずれも漸移的である。海岸砂礫州は、富士川河口から狩野川河口の南側にまでのびている。その大部分は、上に風成砂をのせて砂丘を形成しており、東部では「千本砂丘」、西部では「田子の浦砂丘」などの名称がある。砂丘を含めた砂礫州の平均海拔高度はおよそ+10mであるが、西部の田子の浦港付近では約+26mの最高値を示す。これに対し、背後の低湿地はほとんどが+3m以下と、きわめて低平である。

浮島ヶ原の砂礫州は、現在のものを含めて3列あり(内陸側から順に、砂礫州I、II、III)、古い方の2列(I、II)は現在の海岸砂礫州(III)背後の低湿地に埋没していることが明らかになっている(Matsubara, 1988; 松原, 1989)。

埋没砂礫州は、海成砂礫層上面の平坦面あるいは高まりとして認定される。狩野川河口地域では、3列の砂礫州をすべて認めることができる。また砂礫州IIの高まりは、現在の低地の地形においても、狩野川河口域の砂礫堆として確認できる(図2)。浮島ヶ原東部では、砂礫州列の区別は必ずしも明瞭ではないが、砂礫州Iの高まりの位置が愛鷹山の基盤の高まりに対応していることから、基盤の高まりを土台にして砂礫州が形成されたものと推定される。浮島ヶ原中

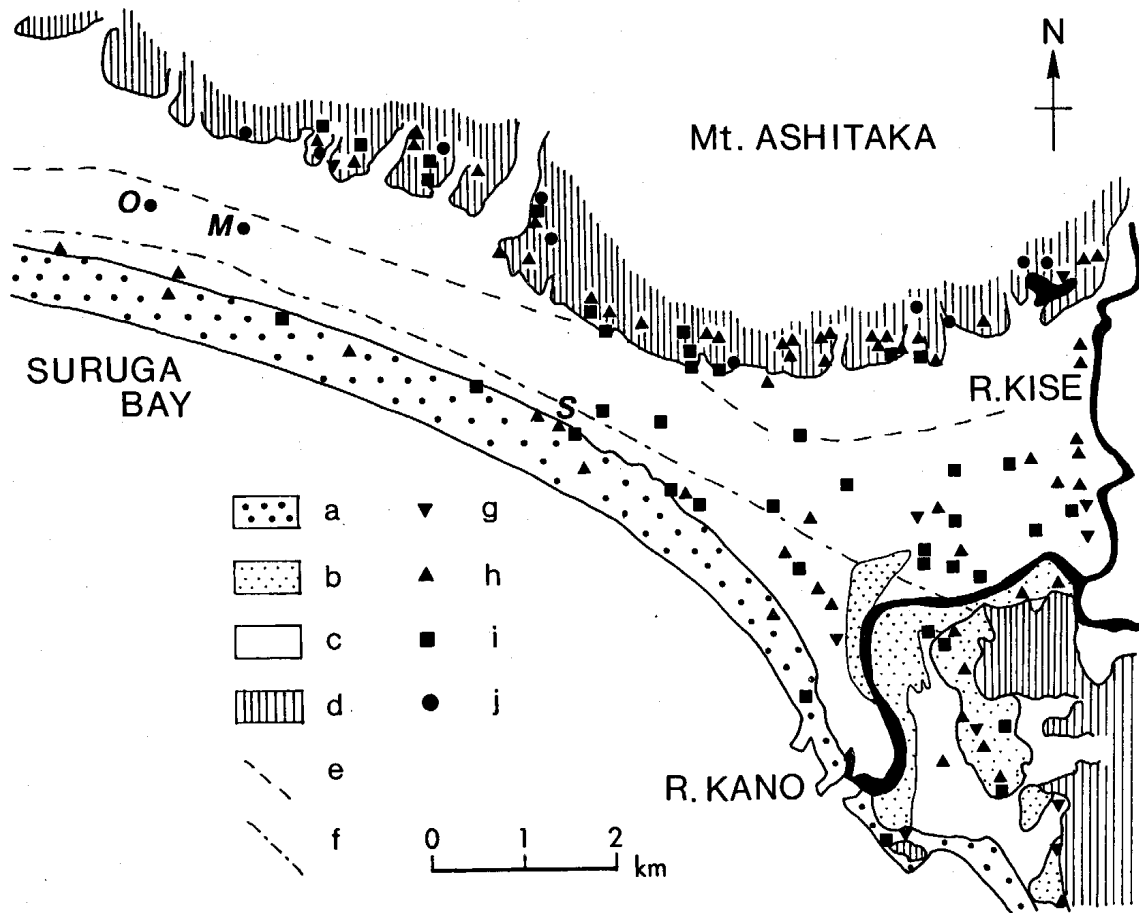


図2 調査地域における地形区分と遺跡の分布

- a. 砂礫州 b. 砂礫堆 c. 後背湿地 d. 山地
 e. 砂礫州Iの内陸縁の位置 f. 砂礫州IIの内陸縁の位置
 g. 歴史時代の遺跡 h. 古墳時代以降の遺跡
 i. 弥生時代以降の遺跡 j. 縄文時代以降の遺跡
 O: 雄鹿塚遺跡 M: 雌鹿塚遺跡 S: 神明塚遺跡
 遺跡の分布は沼津市教育委員会(1987)による

部から西部では、2列の埋没砂礫州が明瞭に認められる。砂礫州Iの上面高度は、低地東部で $-5 \sim +2\text{m}$ であるのに対して、中部では約 -10m 、西部では $-15 \sim -20\text{m}$ と、西に向かって低くなる傾向がある(松原, 1994)。

Matsubara (1988), 松原 (1989), (1994)によれば、浮島ヶ原における砂礫州の発達過程は、以下のようにまとめることができる。

浮島ヶ原地域では、9,000年前頃にはすでに海水の侵入が本格的になり、内

湾の形成が始まっていた。しかし、9,000～8,000年前は、河川水の影響が強まり、陸成堆積物の供給が卓越した時期であった。およそ8,000年前からは、沿岸水・外洋水の影響が内湾の奥にまで及び、すでに砂礫州Iを構成する海成砂礫層の堆積が始まっていた。7,000～6,000年前には、砂礫州Iの背後は潟湖の環境であったが、約6,000年前以降になると、砂礫州Iが完全に離水したために、背後の潟湖は沼沢地・湿地へと変化した。5,000～4,000年前には、砂礫州Iの海側に形成された砂礫州IIによって、砂礫州I側が閉塞されるようになった。さらに、現在の砂礫州IIIが形成されたのは、2,000年前頃であると考えられる。

浮島ヶ原は元来、水はけが悪いため農地には適さなかった。しかし、江戸時代の初期になると新田開発が行われるようになり、しだいに耕地がつくられていった。その後、昭和放水路（1943年）や昭和第2放水路（沼川放水路）（1963年）の完成によって、沼沢地はほとんど姿を消した（沼津市教育委員会、1990）。

ところで、浮島ヶ原およびその周辺地域における遺跡の多くは、低地の北側の愛鷹山麓と、南側の砂礫州（砂丘）上に集中的に分布している（沼津市教育委員会、1987）（図2）。例外的に、低湿地上には雌鹿塚、雄鹿塚と呼ばれる弥生時代後期を主体とする遺跡が確認されている。これらの遺跡は、いずれも低地中央部の微高地上に立地し、これらの微高地は埋没砂礫州（砂礫州I）の一部と考えられる。一方、神明塚遺跡は、雌鹿塚や雄鹿塚よりも海側の現在の砂礫州（砂礫州III）の内陸側の縁辺部に位置する。

II. 浮島ヶ原における低地遺跡の発掘調査結果

1) 雌鹿塚遺跡

1. 遺跡の特徴・微地形

雌鹿塚遺跡は、浮島ヶ原のほぼ中央の微高地の周辺に位置する（図2）。雌鹿塚の地名は、西方約1kmにある雄鹿塚とともに江戸時代から使われており、2つの塚が沼沢地の中の砂山上に存在していたことが記録されている。

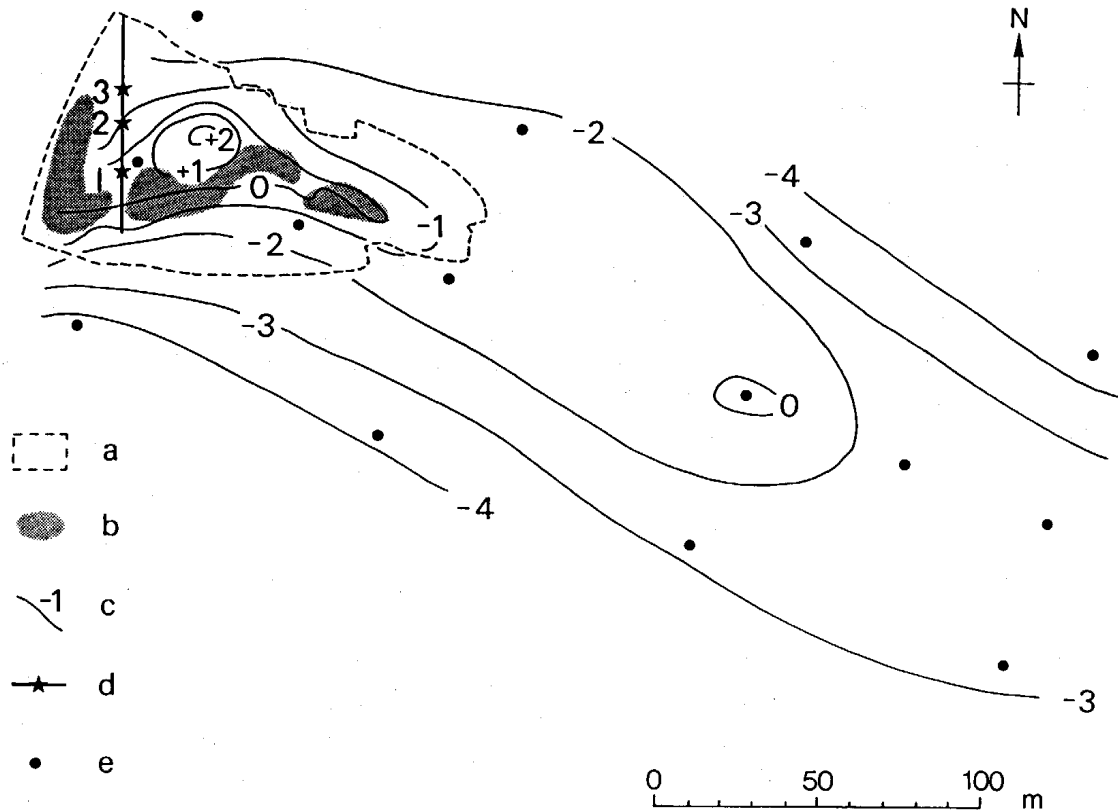


図3 雌鹿塚遺跡周辺の微地形と遺構分布 (松原, 1992)

- a. 発掘範囲 b. 主な遺構分布範囲 c. 砂礫州 I 上面高度等高線 (m)
 d. トレンチの位置 (★: 図 4, 5 の地点の位置)
 e. 既存のボーリング資料の位置

雌鹿塚遺跡の周辺は、海拔高度+1~+2mほどの低湿地であるが、雌鹿塚遺跡の中心は最高高度+2.4mの微高地にあたる(図3)。

雌鹿塚遺跡発掘の際に、堆積物を連続的に観察する目的で、南北方向に長さ約70m、深さ2.5mのトレンチを掘削した(図3)。その際に確認された中砂層(次項参照)は、砂礫州Iを構成する地層と推定される。この砂層の分布範囲を周辺のボーリング資料に基づいて確認した結果、微高地の中心部からさらに東側に連続していることが明らかになった。その上面高度の等高線図を描いたところ、西北西—東南東方向を軸とする埋没砂礫州上面の微地形が明確になった(図3)。

2. 地質層序

トレンチでの堆積物の標準的な地質層序は、下位から順に、中砂層（地点1において、海拔高度+1.1m以下の層準で確認された）、泥炭質砂層（地点2では、海拔高度-0.5~+0.15mの層準（図4）、地点3では、-0.5~-0.3mの層準（図5）にあたる）、砂質泥炭層（地点2では、+0.15~+1.4m、地点3では、-0.3~+0.55mの層準にあたる）、泥炭層（地点2では、+1.4~+1.8m、地点3では、+0.55~+1.3mの層準にあたる）に大別される。

3. 年代資料・テフラ

地点2、地点3の合計5件の試料について¹⁴C放射性炭素年代測定値が得られた（松原，1990）（図4，5）。

地点2の4件の年代測定値を、それぞれの測定試料を採取した地層中の考古遺物の時代と比較すると、最下部が約2,600年前で縄文時代晩期、中部が約1,800年前で弥生時代後期、上部が約1,400年前で古墳時代のように、両者はほぼ対応している。

地点2および地点3の堆積物中からは、浮島ヶ原での分布が広く確認されている伊豆天城カワゴ平軽石（KgP）（約3,000年前に降下）は発見されなかった。地点2と地点3における地質層序の対比から、それぞれの地点での最下部層の年代は3,000年前よりも新しい、と考えられる。したがって、地点3で得られた $3,510 \pm 190$ yr B.P.の年代値は、実際の年代よりも古い可能性がある。

トレンチにおける堆積物の観察の結果、泥炭層中の2つの層準からスコリアが検出された（図4，5）。このうち、上位のものは暗褐色を呈し、平均粒径は6~7mmである。このスコリアは、海拔高度+0.5~+2.0m（古墳時代中期の遺物包含層の直上）に厚さ4~5cmの層を成し、連続性が良い。一方、下位のスコリアは同じく暗褐色を呈するが、平均粒径は2~3mmと小さく、海拔高度±0m付近（縄文時代晩期の遺物包含層の直上）にレンズ状に挟まれており、連続性は悪い。両者の重鋳物分析の結果、上位のスコリアはカンラン石が80%以上を占めているのに対して、下位のスコリアは斜方輝石が70%以上を占める、という違いがみられた（沼津市教育委員会，1990）。これらの結果から両者のスコリアは異なるものである、と考えられる。両スコリアの産出層準付近の年代

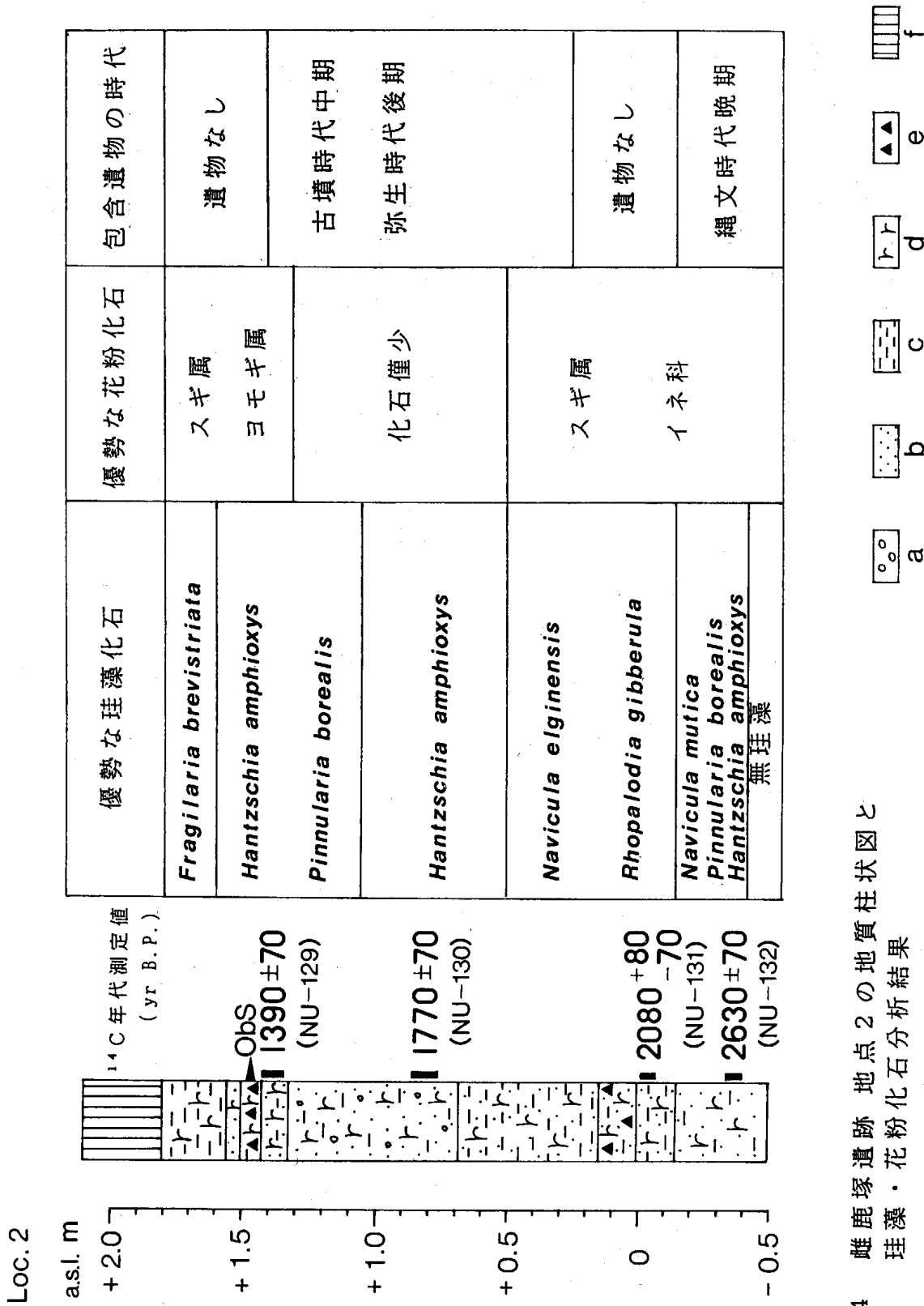


図4 雌鹿塚遺跡 地点2の地質柱状図と珪藻・花粉化石分析結果

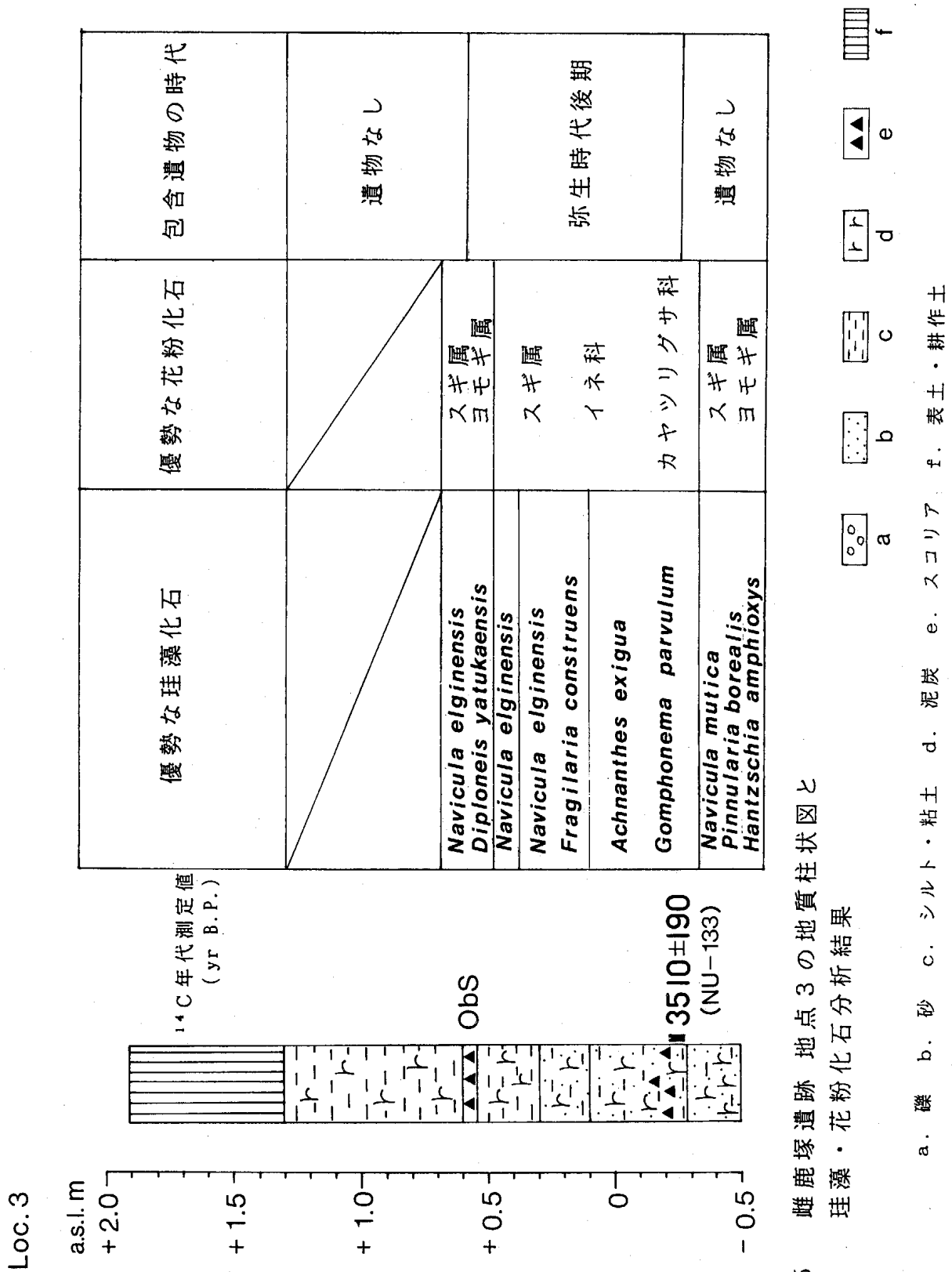


図5 雌鹿塚遺跡 地点3の地質柱状図と珪藻・花粉化石分析結果

測定値および包含遺物の時代から、スコリアの降下年代はそれぞれ1,400～1,300年前、約2,000年前と推定される。上位のスコリアは組成鉱物と噴出年代から判断して、富士山起源とされる大淵スコリア (Obs) (加藤ほか, 1959; 増島, 1981; 松原, 1989) に対比しうる。

下位のスコリアについては、分布・噴出源などが不明であり、今後、浮島ヶ原の他の地点で資料を蓄積する必要がある。

4. 珪藻・花粉化石

地点2と地点3の試料について珪藻化石と花粉化石の解析を行った(沼津市教育委員会, 1990; 松原, 1990)。分析試料は、約10～30cm間隔で採取した。

珪藻化石は、地点2、地点3ともに、ほぼ全試料から産出した。珪藻化石群集は、淡水性珪藻が大半を占める。海水種あるいは汽水種は、砂質堆積物中からごくわずかに産出したが、これらは砂礫州側から砂とともに供給された異地性種である可能性が大きい。

地点2における珪藻化石群集から復元される古環境の変化は、次のようである(図4)。

海拔高度 $-0.4 \sim -0.15$ mの層準(約2,600～2,000年前)では、*Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Hantzschia amphioxys*などの陸生種が優勢であり、雌鹿塚周辺が好氣的な環境にあったことが考えられる。一方、 $-0.15 \sim +0.5$ mの層準(約2,000～1,800年前)では、*Navicula elginensis*, *Rhopalodia gibberula*が優勢となり、沼沢地・湿地の環境に変化したものと推定される。 $+0.5 \sim +1.6$ mの層準(約1,800～1,300年前)では、陸生種(*Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis*)が卓越するようになり、環境は再び好氣的なものになったことが考えられる。 $+1.6 \sim +1.8$ mの層準(約1,300年前以降)では、浮遊性ないし底生種の*Fragilaria brevistriata*が優勢種となり、雌鹿塚周辺に水深のある沼沢地が形成されたことを示す。

このように、雌鹿塚の周辺は少なくとも約2,600年前以降は、沼沢地・湿地的な環境であったが、完全に滞水した時期と、一部のみが滞水した好氣的な環境をもつ時期とが交互に訪れていたことが推定される。好氣的環境を示す地層からは考古遺物が発見されるのに対して、完全に滞水した環境を示す地層から

は遺物が発見されないという事実から、こうした環境変化は、人間活動に影響を及ぼしたものと考えられる。

地点3では、地点2と同様に陸生種の優勢な時期から底生種の優勢な時期への変化が認められる(図5)。ただし、地点3では全体に、地点2よりも底生種の割合が大きいことから、滞水の期間が相対的に長かったものと推定される。これは、地点3が地点2に比べて内陸側、すなわち沼沢地・湿地の中心に近い側に位置していることを反映したものであろう。

花粉化石分析の結果、樹木花粉ではスギ属が最も優勢であり、これにコナラ属アカガシ亜属が随伴する(図4, 5)。このことから、雌鹿塚の周辺、すなわち愛鷹山山麓地域の植生は、スギ林が卓越し、照葉樹もみられるものであったと推定される。

一方、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科とヨモギ属が優勢である(図4, 5)。試料中からイネのプラント・オパールを検出しなかったことから、ここでのイネ科の花粉はヨシなどを中心とした沼沢地・湿地の植生を示すものと考えられる。また、ヨモギ属は、砂礫州上に生育していたものである可能性が大きい。

なお、2枚のスコリアの上下で、それぞれ花粉化石の出現傾向に特別な変化がみられないことから、スコリアの降下による遺跡周辺の植生への影響はさほど大きなものではなかった、と推定される。

5. 遺物・遺構

今回、沼津市教育委員会(1990)がまとめた遺物・遺構の分布範囲と時代、および雌鹿塚遺跡の生活様式の変遷は、次のようなものである。

発掘によって出土した遺物は、縄文時代から古墳時代にまでわたるが、特に弥生時代後期と古墳時代中期に集中する(図4, 5)。また、確認された遺構はほとんどすべてが弥生時代後期に属するものであった。遺構は埋没砂礫州の南側の斜面に集中しており、微高地の北側では遺物がわずかに出土するだけであった(図3)。縄文時代の遺物は、微高地の北西側だけでみつかったが、弥生時代以降の掘り返しによって縄文遺跡が破壊された可能性もあり、その全貌は明らかでない。遺構は埋没砂礫州の堆積物である中砂層を基盤にしてつくられており、海拔高度-1~+1mの範囲に集中する。

雌鹿塚は縄文時代中期から営まれた遺跡であるが、縄文時代中期および後期についてはそれぞれ出土する遺物が少ないことから、恒常的な集落ではなかった、と推定される。縄文時代晩期には遺物の出土が増えることから、やや長期的な生活の場になったものと考えられる。さらに弥生時代後期になると、竪穴住居址などが多数発見されており、集落の形成が推定される。しかし、古墳時代前期には集落の規模が縮小し、中期に一時的に拡大するものの、古墳時代後期以降は遺物・遺構が発見されなくなることから、雌鹿塚は放棄されたと考えられる。

雌鹿塚遺跡では、漁具（石錘）と木製の農具がともに出土しており、生活の基盤として漁労と農耕の両方が考えられる。ただし、今回の発掘調査では舟の出土はなく、また水田址も発見されなかったために、漁労、農耕の実態については明らかにならなかった。

2) 雄鹿塚遺跡

1. 遺跡の特徴・微地形

雄鹿塚遺跡は、雌鹿塚遺跡の約1km西方に位置し、最高高度+2.4mの微高地の周辺に分布する（図2）。

雄鹿塚は、雌鹿塚と対を成す遺跡であると考えられる。

2. 地質層序・テフラ

雄鹿塚遺跡では、東西方向に総延長約80m、深さ約2.5mのトレンチを掘削した。トレンチの堆積物を観察した結果、標準的な地質層序は、下位から順に、中砂層（微高地頂部付近のみで確認された）、泥炭質砂層（図6のI層（海拔高度-1.2~-0.75m））、砂質泥炭層（図6のII層（-0.75~±0m））、泥炭層（図6のIII層（±0~+0.8m））に大別される。これらの地層は、それぞれ雌鹿塚のものに対比できる。

雄鹿塚では-1.0~-0.9m付近から軽石が、±0m付近からスコリアが、それぞれ発見された。軽石は、きわめて連続性が悪いが、上位の地層中から縄文時代晩期の考古遺物が発見されていることから、約3,000年前のカワゴ平軽石（KgP）と推定される。一方、スコリアは連続性が良く、雌鹿塚遺跡の地質層

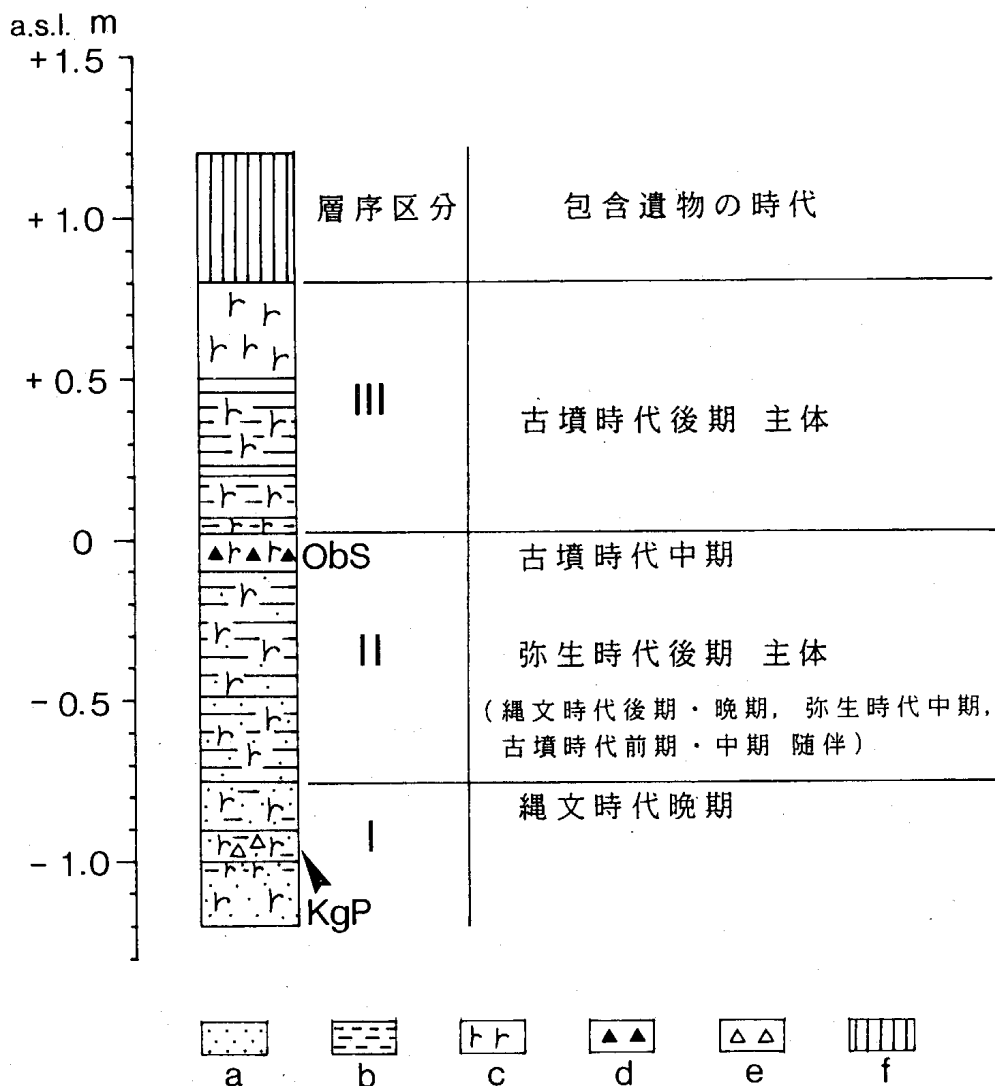


図 6 雄鹿塚遺跡の地質柱状図と遺物の出土層位

- a. 砂 b. シルト・粘土 c. 泥炭 d. スコリア
- e. 軽石 f. 表土・耕作土

序との対比から大淵スコリア (Obs) と考えられる。

3. 遺物・遺構

雄鹿塚遺跡での発掘調査は、トレンチによるものだけで、全面的な発掘は行われなかった。しかも、調査範囲が、遺跡の中心と推定される微高地の南側には達しなかったことから、明確な遺構の発見は少なかった。

遺構の分布は、微高地の頂部付近に限定される。遺構は、雌鹿塚の場合と同様に、砂礫州 I を構成する中砂層を基盤としてつくられている。遺物の時代は、

縄文時代晩期から古墳時代後期にわたるが、中でも弥生時代後期の遺物が最も多い(図6)(沼津市教育委員会, 1989)。

遺物の量が最も多かった時代が弥生時代後期である点は、雌鹿塚遺跡と共通する。ただし、集落が営まれたと考えられる時代が、雌鹿塚では縄文時代中期から古墳時代中期までであるのに対して、雄鹿塚では縄文時代晩期から古墳時代後期までと、若干の時間のずれが存在する。

3) 神明塚古墳

1. 遺跡の特徴・微地形

神明塚古墳は、浮島ヶ原東部に位置し、砂礫州 II の頂部付近、あるいは現在の砂礫州(砂礫州 III)の内陸側の縁辺部にあたる(図2)。

古墳の最高高度は+12.6m であるが、墳丘の盛土を除いた高度は約+7m である。古墳は北側で浮島ヶ原の低湿地に接するが、その境界付近の低湿地の高度は+5~+6m である。

神明塚古墳は、周濠を伴う前方後円墳であり、後円部墳頂に神明社があることから、昭和23年に「神明塚古墳」と命名された。神明塚古墳の周辺には、14基の円墳が確認され、これらは総称して「松長古墳群」と呼ばれている。神明塚古墳は、松長古墳群の中で盟主的な存在であり、沼津市指定史跡にもなっている(沼津市教育委員会, 1983)。

2. 地質層序・テフラ

古墳北側の低湿地との境界付近で掘削した深さ約2mのトレンチでは、砂礫層が確認された(図7)。+5.3~+5.45mの地層は、平均礫径6~8mmの円礫が主体である。このうち+5.4~+5.45mはかなり固結した赤褐色の砂礫層で、スコリアが含まれる。年代を示す資料は得られていないが、このスコリアは、大淵スコリア(ObS)である可能性が大きい。+5.45~+5.7mの地層は、平均礫径8~10mmの円礫を主体とする。+5.7~+6.3mは、平均礫径10mm程度の円礫層に、最大長径70~100mmの扁平礫が混入する。扁平礫は、かつての海浜礫と推定され、砂礫州 II, IIIの構成層の一部であると考えられる。+6.3~+6.6mの地層は、粘土質砂層をマトリックスとする礫層である。

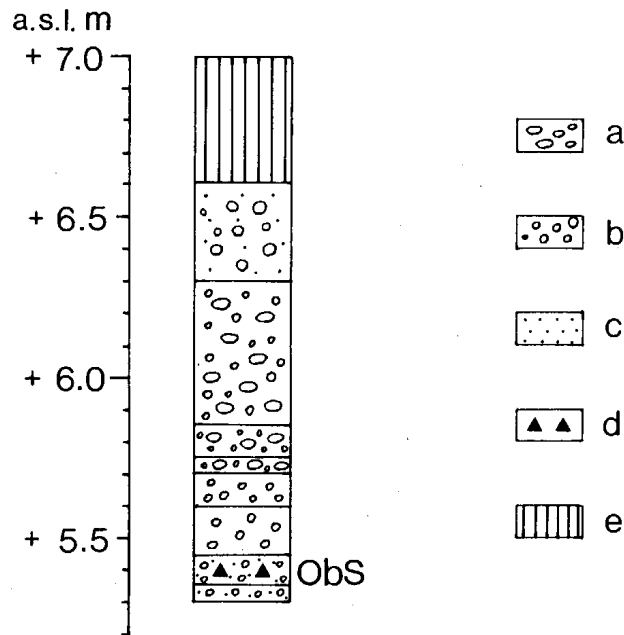


図7 神明塚古墳周辺の地質柱状図

- a. 扁平礫 b. 円礫 c. 砂
d. スコリア e. 表土・耕作土

3. 遺物・遺構

神明塚古墳は、現在の砂礫州に沿ってほぼ東西に主軸をとり、西方に前方部を向けてつくられている。墳丘の全長は54m、前方部は長さ21m、幅24m、高さ2.5m、後円部は直径35m、高さ5mである。

墳丘は、自然地形をあまり利用せず、ほとんどが全面盛土で形成されている。また、幅約8mの溝が古墳の南側、すなわち現在の砂礫州側だけに掘られていることから、周濠は南側だけを巡ってつくられ、高度の低い北側には存在しなかったものと推定されている。

古墳の形成時期は、形式や構造などからみて、古墳時代中期中半から後半にかけて（紀元5世紀後半～6世紀初頭頃）のものと推定されている。

この墳丘の下には、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡（上ノ段遺跡と呼ばれる）が存在する。したがって、墳丘内や周濠から出土する弥生時代の土器片などは、古墳築造時に下位の地層から混入したものとみなすことができる（沼津市教育委員会，1983）。

III. 浮島ヶ原の自然環境変遷と人間活動との関係

1) 雌鹿塚周辺における自然環境変遷と人間活動

すでに明らかになっている浮島ヶ原の地形発達過程 (Matsubara, 1988 ; 松原, 1989 ; 1994) と、今回の調査結果に基づけば、雌鹿塚遺跡周辺、すなわち砂礫州 I 付近での自然環境の変遷と人間活動との関係は、以下のように推定される (図 8, 9)。

雌鹿塚周辺で最初に人間活動がみられる縄文時代中期は、砂礫州 II の完成によって、背後の砂礫州 I 側の地域が潟湖から沼沢地に変化した時期 (約 4,000 年前) に一致する。この時期には、海からの直接の影響を受けなくなったために、本地域が人間生活に適した場所になり、砂礫州の微高地を利用して人間が進出したものと推定される。また、集落が形成された弥生時代後期は、砂礫州 III が完全に離水して背後の閉塞を完了した時期 (約 2,000 年前) に相当するが、これは、雌鹿塚周辺が定住可能な環境になったことを示す。

一方、トレンチでの調査において確認された最も新しい時代の遺物は、大淵スコリア (ObS) 直下から出土する古墳時代中期のもので、大淵スコリア (ObS) 以上の地層中からは遺物は出土しない。雌鹿塚で人間活動がみられなくなる古墳時代後期は、大淵スコリア (ObS) の降下時期 (約 1,500 年前) にほぼ一致する。以上のことは、スコリアの降下が人間生活に何らかの影響を及ぼした可能性を示唆する。また、本地域が少なくとも完新世を通して沈降傾向にあることから (松原, 1989 ; 1994)、海岸砂礫州の埋没が進行して、この時期、雌鹿塚周辺がもはや生活の場に適さなくなったことも考えられる。

2) 古地理と人間活動の変遷

雌鹿塚、雄鹿塚、神明塚の 3 つの遺跡における調査の結果、浮島ヶ原での人間活動の過程は、次のようにまとめられる。

低湿地へ人間が進出した時期は、約 4,000 年前の縄文時代中期にまでさかのぼる。その際、人間の活動拠点となったのは雌鹿塚、雄鹿塚であるが、これら

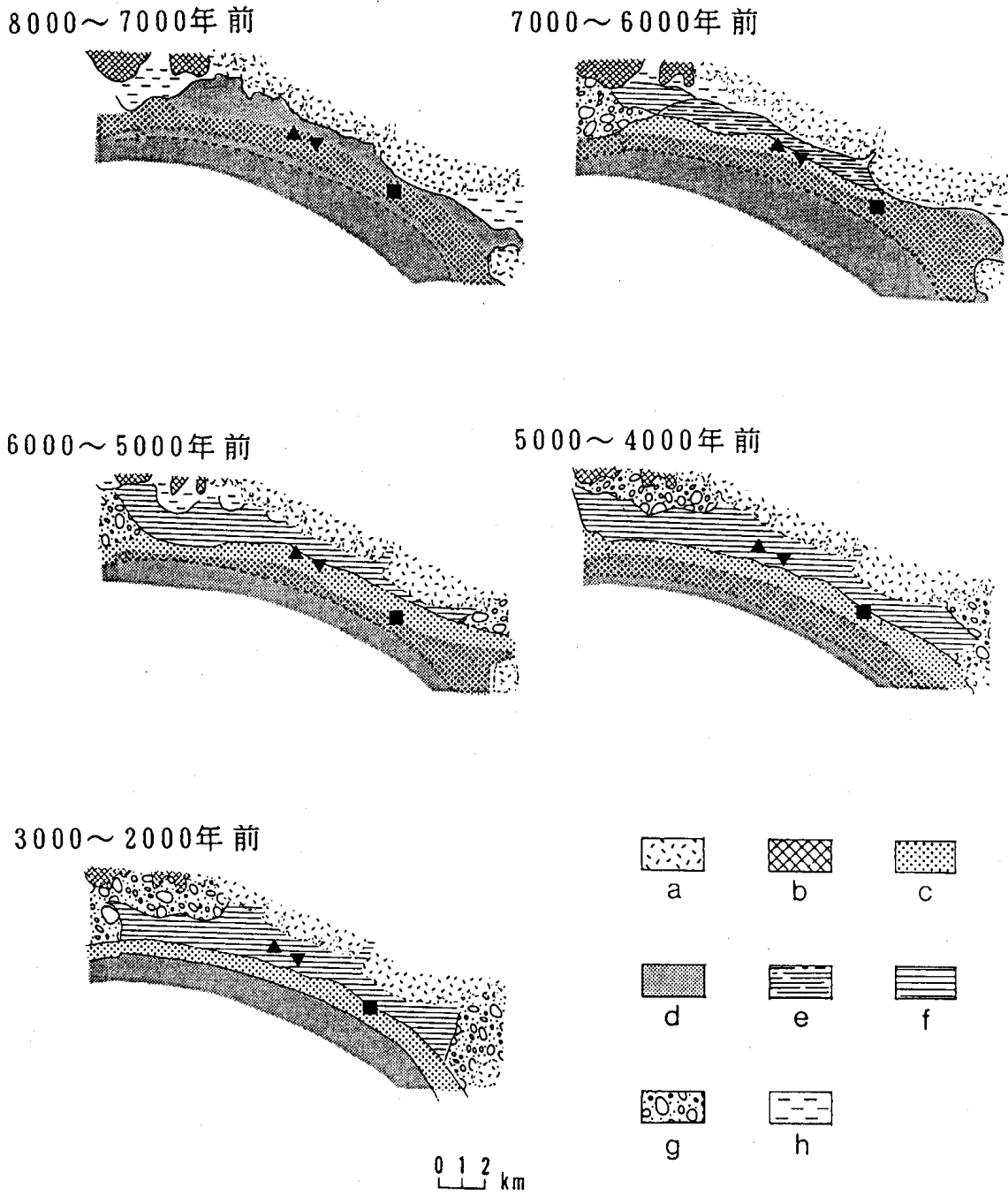


図8 浮島ヶ原における古地理の変遷

- a. 山地 b. 富士山溶岩 c. 砂礫州 d. 海域 e. 潟湖
f. 沼沢地・湿地 g. 扇状地 h. シルト・粘土堆積域
- ▲ 雄鹿塚の位置 ▼ 雌鹿塚の位置 ■ 神明塚の位置

松原（1994）に加筆

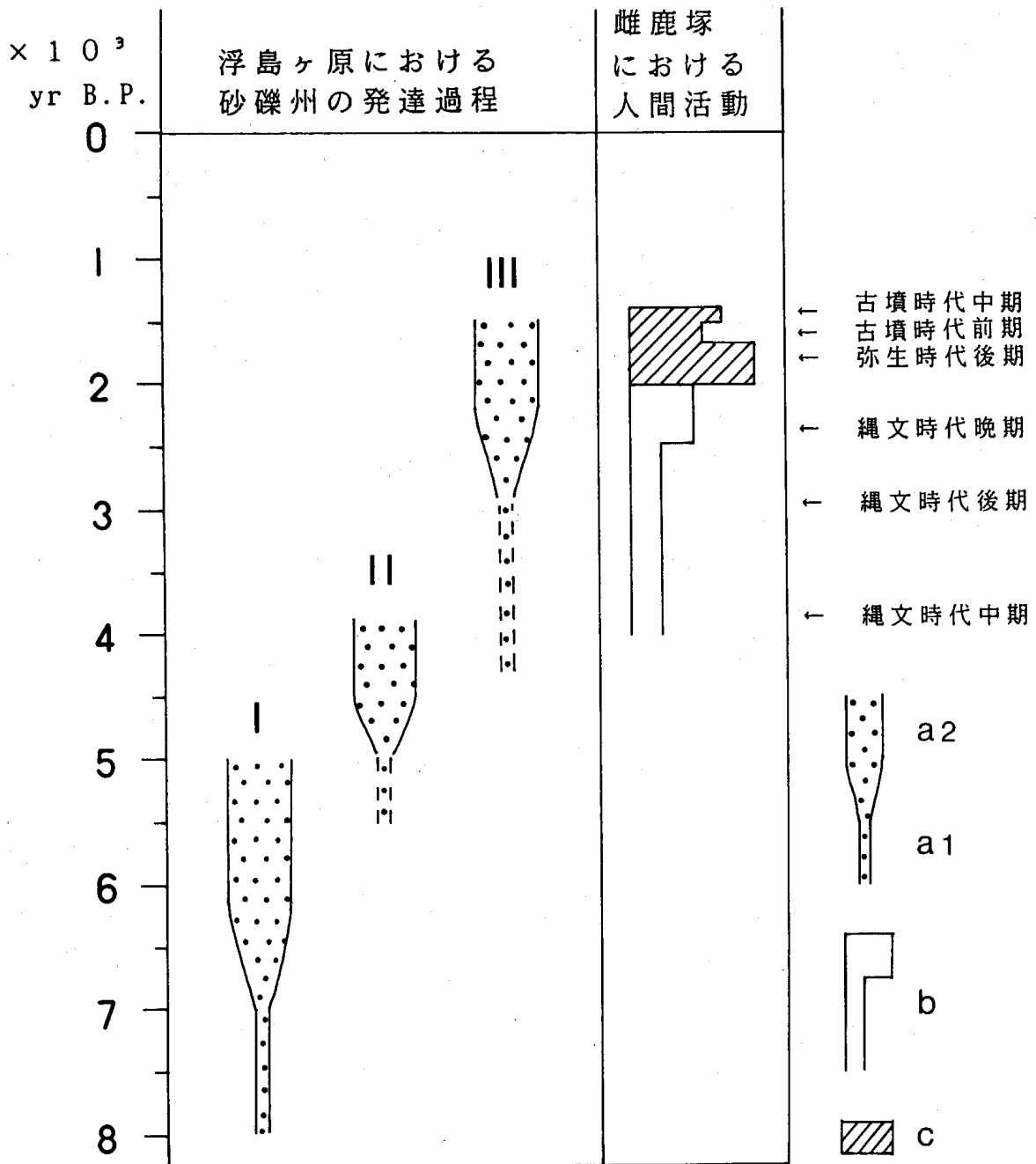


図9 浮島ヶ原における自然環境と人間活動の変遷

a 1. 砂礫州形成期 (閉塞開始期)

a 2. 砂礫州完成期 (閉塞完了期)

b. 人間の活動およびその相対的規模 c. 集落形成期

松原(1992)に加筆

は、砂礫州 II による閉塞と沈降運動の影響で埋没しつつあった、砂礫州 I 表面の微高地にあたる。これらの場所は、漁労活動の中継基地的な役割をもっていたものと考えられる。その後、約 2,000 年前の弥生時代後期になると、砂礫州 III が離水して、浮島ヶ原中央部の環境がより安定したものになったことから、こうした拠点で、恒常的な集落が営まれるようになった。同じ頃に、この集落の母体となる集団が愛鷹山麓に拡大した、と推定される。一方、浮島ヶ原海岸部の砂礫州 II, III への人間の進出もこの時期にすでに始まっていた。

約 1,500 年前の古墳時代になると、愛鷹山麓域や浮島ヶ原中央部での人間活動は縮小する。これに代わって、人間生活の中心は、海側の砂礫州 II, III の上へと移り、神明塚をはじめとする古墳群が形成されるようになった。

以上のように、浮島ヶ原における人間活動の場は、浮島ヶ原中央部から海岸部へと移ってきたが、それは内陸側から海側に向かう砂礫州の発達過程に対応するものであった。

IV. まとめ

本研究では、浮島ヶ原の雌鹿塚、雄鹿塚、神明塚における遺跡発掘調査の成果に基づき、本地域における古地理変遷と人間活動との関係について考察を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

1. 浮島ヶ原中央部の砂礫州 I 上への人間の進出は、約 4,000 年前の砂礫州 II の完成期に行われた。これによって、雌鹿塚や雄鹿塚が形成された。
2. 砂礫州 I 上での定住生活が始まったのは、約 2,000 年前の砂礫州 III の完成期に一致する。
3. 浮島ヶ原海岸部の砂礫州 II, III 上への人間の進出時期は、砂礫州 I での定住生活期、すなわち約 2,000 年前の砂礫州 III 完成期にほぼ一致する。
4. 砂礫州 II, III が定住生活の場となるのは、砂礫州 I 上での人間活動が衰退する約 1,500 年前以降である。

浮島ヶ原における人間活動の変遷は、本地域の内陸側から海側への砂礫州の発達という古地理の変遷過程によく対応している。

今後、複数の海岸平野で、自然地理学的調査と考古学的調査とが同時に行われてゆけば、自然環境と人間活動との関係について、普遍性と地域性の両面から考察することが可能になるろう。

謝辞

本研究を行うにあたり、沼津市教育委員会の鈴木裕篤主任学芸員をはじめとする皆様には、現地調査および資料収集にあたって、お世話いただいた。

¹⁴C年代測定は、日本大学文理学部自然科学研究所に、珪藻・花粉化石分析は、株式会社パレオ・ラボに、それぞれ依頼した。

以上の方々に、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 加藤芳朗・近藤鳴雄・松井 健・岩佐 安 (1959) : 原町浮島ヶ原の地質と土壌, 28p. 静岡県駿東郡産業課。
- 沼津市教育委員会 (1983) : 沼津市文化財調査報告書 第29集 神明塚古墳, 36p. 沼津市。
- 沼津市教育委員会 (1987) : 沼津市埋蔵文化財分布地図, 34p. 沼津市。
- 沼津市教育委員会 (1989) : 雌鹿塚遺跡発掘調査報告, 106p. 沼津市。
- 沼津市教育委員会 (1990) : 雌鹿塚遺跡発掘調査報告書・遺構編, 沼津市教育委員会編「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書I」, 1-152. 沼津市。
- 増島 淳 (1981) : 大淵スコリア層の研究, 静岡地学, 43, 1-3。
- 松原彰子 (1984) : 駿河湾奥部沖積平野の地形発達史, 地理評, 57A, 37-56。
- Matsubara, A (1988) : Geomorphic development of barriers in the coastal lowlands during the Holocene— A case study of the coastal lowlands along the Suruga Bay, Central Japan —, Bull. Dept. Geogr., Univ. Tokyo, 20, 57-77.
- 松原彰子 (1989) : 完新世における砂州地形の発達過程—駿河湾沿岸地域を例として—, 地理評, 62A, 160-183。
- 松原彰子 (1990) : 雌鹿塚遺跡周辺における自然環境の変遷, 沼津市教育委員会編「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書I」, 171-215, 沼津市。
- 松原彰子 (1992) : 静岡県浮島ヶ原・雌鹿塚遺跡における自然環境と人間活動の変遷, 第四紀研究, 31, 221-227。
- 松原彰子 (1994) : 浮島ヶ原の古環境変遷—砂礫州の発達過程と沈降運動, 地質調査所月報 (印刷中)。
- 米倉伸之・池田安隆・鹿島 薫・松原彰子 (1985) : 駿河湾周辺の海岸低地における沖積層掘削調査, 『最終氷期以降の自然環境の変動』 昭和58・59年度 東京大学特定研究経費成果報告書, 35—80。